

武蔵野日曜集会

こと終わりぬ

――ヨハネ伝第19章――

1968年7月21日

小池辰雄

キリストのどん底 ユダヤの王ナザレのイエス 十字架上の言葉 「彼らを赦し給え」(第一言)
「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第二言) 「これ汝の母なり、汝の子なり」(第三言) 「なんぞ我を棄てたまひし」(第四言) 義は与えられるために棄てられた 「われ渴く」(第五言) 「こと終わりぬ」(第六言) 「わが霊を汝の御手にゆだね」(第七言) 永遠の贖罪を終えた 此岸彼岸これ一如

【ヨハネ19】

1 爰にピラト、イエスをとりて鞭^{むち}つ。2 兵卒ども茨^{いばら}にて冠冕^{かんむり}をあみ、その首^{くび}にかむらせ、紫色の上衣^{うわぎ}をきせ、3 御許に進みて言う 『ユダヤ人の王やすかれ』
而して手掌^{てのひら}にて打てり。4 ピラト再び出でて人々にいう 『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』5 爰にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う 『視よ、この人なり』6 祭司長・下役どもイエスを見て叫びていう 『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言う 『なんじら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』7 ユダヤ人こたう 『我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』8 ピラトこの言をききて増々おそれ、9 再び官邸に入りてイエスに言う 『なんじは何処^{いずこ}よりぞ』イエス答をなし給わず。10 ピラト言う 『われに語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか』11 イエス答え給う 『なんじ上より賜わらずば、我に対して何の権威もなし。この故に我をなんじに付しし者の罪は更に大いなり』12 斯においてピラト、イエスを赦^{ゆる}さんことを力^{つと}む。然れどユダヤ人さけびて言う 『なんじ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛^{そむ}くなり』13 ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石(ヘブル語にてガバタ)という処にて審判の座につく。14 この日は過越^{すけし}の準備日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、ユダヤ人に言う 『視よ、なんじらの王なり』15 かれら叫びていう 『除け、除け、十字架につけよ』ピラトいう 『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司長ら答う 『カイザルの他われらに王なし』16 爰にピラト、イエスを十字架に



釘くるために彼らに付せり。

17 彼らイエスを受取りたれば、イエス已に十字架を負いて髑髏（へブル語にてゴルゴタ）という処に出でゆき給う。18 其処にて彼らイエスを十字架につく。又ほかに二人の者をも十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。19 ピラト罪標（すてふだ）を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記したり。20 イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人この標（ふだ）を読む、標はヘブル、ロマ、ギリシヤの語にて記したり。21 爰（こゝ）にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』22 ピラト答う『わが記したることは記したるままに』

23 兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣（したぎ）を取りしが、下衣は縫目（ぬいめ）なく、上より惣（すべ）て織りたる物なれば、24 兵卒ども互にいう『これを裂くな、誰がうるか鬪（く）にすべし』これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬪（く）にせり』兵卒ども斯くなしたり。25 さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。26 イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』27 また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。

28 この後イエス万（よろず）の事の終りたるを知りて――聖書の全うせられん為に――『われ渴く』と言い給う。29 ここに酸（す）き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿（うめ）をヒソプに著けてイエスの口に差附（さしつ）く。30 イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事（こと）畢（お）りぬ』遂に首をたれて霊をわたし給う。

31 この日は準備（そなへ）日なれば、ユダヤ人、安息日に屍（しかばね）体を十字架のうえに留（とど）めおかじとて（殊にこの度の安息日は大なる日なるにより）ピラトに、彼ら脛（はざ）をおりて屍体（しかばね）を取除（と）かんことを請う。32 ここに兵卒ども来りて、イエスとともに十字架に釘（く）けられたる第一の者と他のものとの脛（はざ）を折り、33 而してイエスに来りしに、はや死に給うを見て、その脛（はざ）をおらず。34 然るに一人の兵卒、鎗（やり）にてその脅（わき）をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。35 之を見しもの証（あかし）をなす、その証（まこと）は真なり、彼はその言うことの真なるを知る、これ汝等にも信ぜしめん為なり。36 此等のことの成りたるは『その骨くだかれず』とある聖句の成就せん為なり。37 また他に『かれら己が刺したる者を見るべし』と云える聖句あり。

38 この後、アリマタヤのヨセフとてユダヤ人を懼（おそ）れ、密（ひそ）かにイエスの弟子た



りし者、イエスの屍体^{しかばね}を引取らんことをピラトに請いたれば、ピラト許せり、乃ち^{すなわ}往きてその屍体^{しかばね}を引取る。³⁹ また曾て夜、御許に來りしニコデモも、没藥・沈香の混和物を百斤^{きん}ばかり携えて来る。⁴⁰ ここに彼らイエスの屍体^{しかばね}をとり、ユダヤ人の葬りの習慣にしたがいて、香料とともに布にて巻けり。⁴¹ イエスの十字架につけられ給いし処に園あり、園の中にいまだ人を葬りしことなき新しき墓あり。⁴² ユダヤ人の準備日なれば、この墓の近きままに其処にイエスを納めたり。

●キリストのどん底

今日はヨハネ伝19章です。福音を学んで、十字架のところをすつとばすわけには絶対にいかんわけです。今日はキリストのどん底のところですよ。

1 爰^{こゝ}にピラト、イエスをとりて鞭^{むち}つ。² 兵卒ども茨^{いば}にて冠冕^{かんむり}をあみ、その首^{くび}にかむらせ、紫色^{うわぎ}の上衣^{うわぎ}をきせ、御許^{みもと}に進みて言う『ユダヤ人の王やすかれ』これは非常に侮蔑^{おとしめ}したところの言葉です。

而して手掌^{てのひら}にて打てり。⁴ ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』⁵ 爰^{こゝ}にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』

ピラトというのはとにかく公正な気持を持っていたわけです。ローマの代官ですから。⁶ 祭司長・下役どもイエスを見て叫びていう『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言う『なんじら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』この「見ず」というのは、「見出さない」という意味です。

⁷ ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』

自分で「神の子」と言った。これは冒瀆^{ぼうとく}だと。

⁸ ピラトこの言をききて増々おそれ、⁹ 再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処^{いづこ}よりぞ』

「天から来たか、地から来たか」というわけです。

イエス答をなし給わず。¹⁰ ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか』¹¹ イエス答え給う

「権威」と言われたので、そこでキリストははっきり言われた。

『なんじ上より賜わらずば、我に対して何の権威もなし。この故に我をなんじに付^つしし者の罪は更に大いなり』

こと「罪」の問題となつたらば、イエスは絶対の権威者です。彼らはこの「罪」のこと



を審く権威は持たない。彼ら自身が罪びとである。本当に罪のことを審く権威を持つのは神だけ。また、神の子キリストだけです。その他に実は、人が人を審く権威はない。ここに地上の政治のまた刑法の非常に限界というものがありません。だから、地上で不当な審判を受けても、天上においては必ず正当な審判に合う。人間の判断とは違ったものです。刑法学者というものは、およそ裁判のことに携わる人々はみなその気持でおられると思いますけれども。非常に森厳なことです。人が人を裁くということは。心を本当に静めて清めてかからないと、できないわけです。

「人を審くな。その汝が審く審判にて審かれるぞ」

と、恐ろしい言葉があります。マタイ伝7章でした。だから、神からの権威を受けとっていないければ、審くことはできない。本当に聖霊にあるときには、聖霊にあつて権威を持ちますけれども、しかし、それは人間が決してその権威を寸毫も私するわけにいかん。

12 斯においてピラト、イエスを赦さんことを力む。

ピラトはイエスのこの答えに対して、「何を言うか」とは言わない。彼はやはり非常に良心的な人だったとみえまして、努めて赦さんことを求めていた。ローマ人というのは法の民ですから、法に対してはなかなか良心的なものが一面あつたということも、ピラトをみても言えるかと思えます。ギリシア人は文化の民、ローマ人は法の民、ユダヤ人は宗教の民と、まあ大雑把に言つて、そんな特色を持つていてしょうね。ドイツ人はどちらかというと、意志的な道德の民。日本人は情的な芸術の民――非常に勘がいいですからね――そのような特色があるかもしれません。しかし、その芸術がまた深く宗教とも連なる面がありますけれども。

●ユダヤの王ナザレのイエス

然れどユダヤ人さげびて言う『なんじ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛くなり』

「王」と言いましても、霊界の王と地上の王と、同じ「王」といつてもまるで次元が違うのに、こういう詭弁を弄する。

「王と言っているからダメじゃないか。これはカイザルに背くことになるから」

と。「メシヤ」という言葉もそういう意味でもって非常に警戒されたわけです。ユダヤ人は地上に王国を建てよう、神政王国を建てようというのが、このメシヤの、ユダヤ人の理想ですから。ところが、このイエスは、

「自分はこの世のものではない」

と。ヨハネ伝18章36節で、

「36 イエス答へ給う『わが国はこの世のものならず、若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此



の世よりのものならず』(ヨハネ18・36)

と。私はそもそも天から来たもので、また天に帰っていく。わが故里は天にある。この世とは違うんだ。霊界の王だと。

¹³ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石(ヘブル語にてガバタ)「高い所」というような意味ですが、

という処にて審判の座につく。¹⁴この日は過越^{すていし}の準備日にて、時は第六時ごろなりき。

今でいうと、11時から12時です。

ピラト、ユダヤ人に言う『視よ、なんじらの王なり』

一応、彼らの言葉をそのまま使ってしまった。

¹⁵かれら叫びていう『除け、除け、十字架につけよ』

「除け、除け、彼を十字架せよ」という言い方になっています。

ピラトいう『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司長ら答う『カイザルの他われらに王なし』

相変わらず、しかし、ピラトはキリストの弁護人でもあった。

¹⁶爰にピラト、イエスを十字架に釘^つくるために彼らに付^{わた}せり。

¹⁷彼らイエスを受取りたれば、イエス已に十字架を負いて髑髏^{ざれがく}(ヘブル語にてゴルゴタ)という処に出でゆき給う。¹⁸其^{そこ}処にて彼らイエスを十字架につく。

又ほかに二人の者とともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。

これはルカ伝に非常に詳しく書いてある。四福音書は、みなこのへんの記事は非常にこと細かに叙してあります。いちいち今日はそれを比較するわけではありません。

¹⁹ピラト罪標^{すてふだ}を書いて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記^{しる}したり。

ラテン語で、

「イエスス ナツアレヌス レックス ユダイオールム」

「ユダヤの王ナザレのイエス」

という。これを「INRI」と、向こうの名画にはよく頭文字だけ書いてあるが、この場合は全部書いてあったんでしょね。ギリシア語は、

「イエスス ホ ナタライオス ホ バシレウス トーン ユダイオーン」

それからヘブライ語で。即ち、ヘブライ、ローマ、ギリシアと、その当時の全世界の代表的な民族の――全世界といってもヨーロッパを中心とした全世界ですが――そういう罪標^{すてふだ}を記した。

イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人この標^{ふだ}を読む、



これはエルサレムの外です。西北の方、城門外です。

標^{ふた}はヘブル、ロマ、ギリシヤの語^{ことば}にて記したり。²¹爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』

そういうことを言っただんな。

²²ピラト答う『わが記したることは記したるままに』

「余計なことを言うな」と。

● 十字架上の言葉

²³兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣^{したぎ}を取りしが、下衣は縫目^{ぬいめ}なく、上より惣^{すべ}て織りたる物なれば、

天衣無縫といいますが、正にキリストの衣は天衣無縫であつた。サラツと掛けてあつたんでしょね。

²⁴兵卒ども互にいう『これを裂くな、誰がうるか鬨^ぐにすべし』

これは詩篇22篇にそういうことが書いてある。その通りにやっただんなです。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

という、あの詩篇ですよ。あの詩篇のところにこれが書いてある。

これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬨^ぐにせり』兵卒ども斯くなしたり。²⁵さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。

マグダラのマリヤというのはどれにも出てきます。

²⁶イエスその母とその愛する弟子

「愛する弟子」というのはヨハネに決まっている。ヨハネ伝の主人公。

との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』

²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』

「もう私は向こう側にいくが、これを子とせよ、これを母とせよ」

ということですね。非常に思いやりの深いキリストの言葉です。と同時に、

「私を本当に受けとるものはみな、霊的な親子であり、霊的な兄弟姉妹である」

と、私たちは延長してそうみていいわけです。

この時より、その弟子かれを己が家に接^つけたり。

即ち、イエスのお母さんのマリヤを引きとったというわけです。

²⁸この後イエス万^{よろず}の事の終りたるを知りて――聖書の全うせられん為に――

――『われ渴く』と言い給う。



「デンプソー」という字ですが。血が流れましたから、本当に渴く。大変なものです。
29 ここに酸^すき葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソ
プに著けてイエスの口に差^さ附^つく。30 イエスその葡萄酒をうけて後^{おの}い給う『事
畢^{おわ}りぬ』遂^{つひ}に首^{くび}をたれて霊^{たま}をわたし給う。

片一方では、「受けない」と書いてありましたが。

『事畢^{おわ}りぬ』

と。今日の題が、この「こと終わりぬ」です。

「こと終わりぬ」というのは、ギリシア語で「テテレスタイ」と言いまして、「テレオー」とは「終わる」という字です。「テロス」、何々の「終わり」となったという。

「愛は律法の終わりである」

とか、みんなこの「テロス」という。終局、終末、目的、最後の目的。「テレオロギー」「目的論」という。ドイツ語でいうと、

「Es ist vollbracht」(Es ist vollbracht)

と言いまして、「全うされた」と。英語では、

「It has bin finished」

だね。まさにギリシア語の形もその通りです。現在完了の受け身の形です。

●「彼らを赦し給え」(第一言)

ところで、十字架のことが出てまいりましたので、十字架の上でキリストが発した七つの言葉がある。その第一として――別に順序はそうはつきりとはしませんけれども――ルカ23章34節に、

「34 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』」(ルカ23・34)

罪の赦しのことかまず一番先に叫ばれている。

「私を十字架に付けたんだが、彼らはその為すところを知らない。とんでもないことなんだ、本当は。けれども、私は本当は、彼らに付けられたのではない。自分で十字架にかかった。付けられながら、かかったんだ。私が自分で棄てたんだ」

と。「我棄つる権あり」なんて書いてある。とにかく、その罪の赦しを十字架の上から言われた。

●「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第二言)

それから、その同じルカ伝に、

「43 イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕^{とも}にパラダイスに在るべし』」(ルカ23・43)



とある。片一方の盗賊に向かつて、

「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」

と。パラダイス、これは救いだね。罪の赦しの次は、今度は救済の現実だ。パラダイスへの救い。ルカ伝23章43節、非常に私は好きな言葉です。

「われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」

と。ギリギリのどん詰まりの現実には本当に自分を投げ出したことのない人は、キリストの「十字架」なんて言えるものではない。とにかく、その十字架に本当に、いつか一遍、十字架の前に本当に自分がぶつたおれる。

「もう何もかも問題でないという、完全にキリストの十字架に降参し、また本当にそこに抱かれる」

という、経験を持たなかったらば、これは「聖霊」なんて言ったって、それはダメです、そんな浮わついた聖霊は。宗教は、霊的な現象はいろいろありますよ。ちよつと聖霊らしいのが、他の宗教でも。けれども、福音の世界はこの十字架のどん底の、この十字架の門を――はつきりと、

「もはや一切の問題は問題でない、ただこれのみ」

というところを――本当に突き抜けてきた人が、初めて聖霊ということが言える。そうでなかったらば、聖霊なんて言ったってダメです。

キリストの十字架の両方に盗賊が十字架されてある。これがよく表している。こっちのやつは、

「お前は神の子なら、ひとつ俺たちも一緒に救ってくれないか。この所で奇跡を顕してもらおう」

と、傲慢なわけです。終わりまで傲慢で、これはもう地獄へ行くよりか仕方がない。他に途なし。もう片一方は、

「私は本当に悪いことをして、もうマイナス^{99.9}の生活をしてきました。もうどうにもなりません。当然、私は十字架に付けられて仕方がありません。せめても、天国にいらつしやいますときに覚えてください」

と。忘却の淵に陥ってしまったのではどうにもならない。せめても覚えてきたきたいと。これは心砕けました。キリストの前に降参して、心が砕けた。この砕けの心。キリストは、そういう全身的に、全霊・全心・全身的に――^{からだ}霊と心と身だ――自分を投げ出した人は、文句なしに無条件に取り入れる。ザアカイであろうと、マグダラのマリヤであろうと、何であろうと。とにかく、そういうのは全部取り入れて、パリサイ人よりはるかに先に、本式に天国に行ってしまう。天国にキリストと一緒に入ったナンバーワンは、十字架の盗賊である。心砕けた盗賊である。これが福音です。これが我々のギリギリの現実を表している。



「そんな野郎がいましたか」

ではない。これが私なんだ、この野郎が。だから、もし私が死んだら、

「今日汝は我と共にパラダイスにあるべし」

と書いておいてもらおう。約束しておきます。

そういう、キリストと一緒にまず第一に天界に入って行つたのがこの救われた盗賊です。ここに万人救済の現実が表れている。内村鑑三先生が、万人救済のことを言われた。あのいわゆる「戦場ヶ原の語らい」という、あれは僕は大好きなんだ。

「私の如き者がこの十字架の救いにあずかったのだから、万人は必ず救済されると
いう確信がある」

と。

「いやあ、内村先生というあんな立派な人がそう言っただけでも、他の人はそうはいかん」

と、まあ普通そう思うでしょうね。いや、内村鑑三よりももうひとつ次元の凄いパウロがそう言った。

「ああ、我れ悩める人なるかな、この死のからだから、現実にこの死のからだから私を救ってくれるのは誰であるか。イエスの他にない。自分は罪びとの首である」

と、パウロが言いました。あの驚くべき構造を持つている福音の大黒柱を建てたようなパウロがそう言った。今の青年が忘れている、ただひとつのことはこういう事態なんです。

私は秋に大学祭で一席やります。私は「平和とは何か」という題で語る。そうすると、何か大いに政治問題、平和問題を語るかと思うが、どっこいそうはいかん。まあそのときに見ておいてください、何を言うか。ただこの一事を忘れたということをはつきりと青年に言わなければならない。

●「これ汝の母なり、汝の子なり」(第三言)

それから、三番めは、このヨハネ伝19章の、

「おんなよ、視よ、なんじの子なり。また、視よ、なんじの母なり」(ヨハネ

19・26)

という言葉。

「世界はらから、同胞、全部これは神さまの大家族であるぞ」

と。究極のところは、何人種であろうと、どこ人であろうと、ソ連であろうと、中共であろうと、どこであろうと、全部これは神の大家族であるというのが、神の究極の本願である。

現実は何とそれと離れたことであるか。何もキリストはそんな大袈裟なことは仰らない。

「これ汝の母なり、汝の子なり」



と。問題は、解決は、手近なところから、身近なところから。本当に出会う隣人を愛することなくして、世界の平和の何のと、何のことかと。もはや、ある意味において、私たちは今の行き詰まりの世の中には、預言者的な課題を担わされているわけです。もう既にとき遅しというようなわけでしょうけれども。しかし、仕方がない。遅いということは、神の国においてはひとつもない。

この三番めの、親子・兄弟姉妹、大家族。本当にそれだけの突き抜けをするためには、ただ思われているくらいのことではダメなわけです。まあ、だんだん行きましょう。

●「なんぞ我を棄てたまひし」(第四言)

それから四番めは、

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

これは詩篇22篇の第1節の言葉です。義として生きたイエス、義人はただ一人イエス。それは天界にいきなりサーツとのぼるはずだった。それが棄てられた。

「あなたは自分で義をふみやぶりましたか」

というわけだな、

「なんぞ我を棄てたまひし」

とは。これは全世界の罪に対するとところの戦いの言葉だよな。徹底的な赦しがあるかと思えば、徹底的な戦いがある。もの凄い矛盾構造です、十字架そのものが。クロスしているんだから。聖書は偉大な調和の書であると同時に、深刻きわまりなき矛盾の書です。また、神さまの方からいうと――人間は罪を犯したし、犯すし、犯すであろうから――全部これは滅びにいくに決まっているんだ。

「我々は罪に閉じ込められている」

とパウロが言っているとおりの。自分でもってこの罪から脱出することはできない。

「宗教」なんていいにしても、これはおかしいことですよ。いわゆる阿片的な宗教もあるでしょう。けれども、この人間の罪の問題は、一切の世界の不合理、矛盾、不公平、さまざまなことが行われているのは、みんなこれは人間の罪が錯綜して醸しだしているところの現実だから。万人は救済を要するようにできている。それなのに、

「宗教は、まあそいつはちよつと後回しだ」

なんてやっている。あなたの方の中から文部大臣でも出てきてね、はつきりとそれだけのことを言うような青年が出てこなくては。私はもう情けなくなるよな、正直。

今日は、新しい人たちに来てもらいたかったんだよね。大事なところを話しているのにさ。福音より大事なことがあるんでしょうかね、一体。日曜は万難を排して、お金がなかったら一里でも二里でも歩いて来るだけの魂にならなかつたら、本当の意味において霊的人物



にはなれないですよ。今は、言葉の一番深い意味における霊的人物を必要としている。心霊的という意味ではない。キリストの霊を持った人。ただ「信仰」なんて言っているのではないですよ。

●義は与えられるために棄てられた

ローマ書3章21節から、

「²¹然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、福音に神の義が顕れた。

これ律法と預言者とに由りて証せられ、²²イエス・キリストを信ずるに由りて

イエス・キリストを受けいれることによつて、

凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。

律法の義は自分で守らなければならぬ義であつた。ところが、

「キリストを受けとる者に神さまが与えてくれるところの神の義が顕れた」

というんだな。

之には何等の差別あることなし。

もう全然、差別がない。相手がどうであろうと、これは無条件に与えられる。

²³凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、²⁴功なくして神の

恩恵により、

もつぱら神の恵みによる。

キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせられるなり。

今、キリストが主張している義はそれではないですよ、今は神の義。

²⁵即ち、神は忍耐をもて過来しかたの罪を見逃し給いしが、己の義を顕さん

とて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる

罪を除去するところの、

宥めなだの供物そなえものとなし給えり。²⁶これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、

またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。」(ロマ3・21〜26)

この26節が非常に大事な言葉です。

「神はおのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為である」

と。キリストは義人であつた。その義は棄てられた。何のためにこの義が棄てられたか。この義は与えられるために棄てられたんです。だから、

「なんぞ我を棄てたまひし」

という言葉は、



「あなたはこの義を人に与えようとして、お棄てになったんだ」

と。その反語がそこに響いてくるわけです。キリストは義人であるから、スーッと天界に神の許に行ってしまったら、キリストの義はどうしましょうか、誰に与えましょうか。与えるわけにいかない。

「私のように義人となれ。私のまねをしろ。『キリストにならいて』とやれ」

と。そうしたら、また律法の世界に入ってしまう。どうにもならん。誰にもそのまねができない。キリストの真似が誰もできない。「イミタチオ・クリステイ」（キリストにならいて）なんていったって、本当の意味ではできやしない。だから、

「その義は私がもらったぞ、そして、人にやる」

と。そのことはゲッセマネの祈りでもって彼は既に受けとっているんです。彼はゲッセマネの祈りで既にそれを受けとっていますけれども、もう一遍、十字架上で、

「この神の義が棄てられるんだ、そして与えられるんだぞ」

と、もう一遍、逆説的な表現をキリストはせざるをえない。ええ。いかに罪ということが深刻なものであるかを、この義の叫びによってもう一遍キリストは逆に罪の事態を指摘したわけです。人間の罪はなんとひどいものか。私を棄てるまでに、この義を棄てるまでに、この罪はどうにもならないものであると。それで、この義を、贖罪の、罪の赦し、この贖罪。

「彼らを赦したまえ」

という、この罪の赦しが、罪の赦しとしてこの義が今度は、全面的に与えられるように使われる。だから、

「律法の義の他に、福音のうちに神の義が顕れる」

という。キリストという喜びの音信は、何が喜びの音信か。その内容は、「義を与える」ということである。義を与えることは同時に神の無限の愛である。

なにか「可愛がる」というような愛ではないですよ、この愛は。おそろしい愛ですよ。「義を与える」ということが即ち、アガペーなんです。そこが仏教的な大慈大悲とは大いに性格が違う。福音の世界は筋金に通っている。そこはぼかしてはいかん。私はもちろん仏教を非常にいろいろな意味において評価します。けれども、ちゃんともうずっと立つものが立っている。この縦のものの凄い柱と、横のものの凄い広がり。

「神の恵みはいと高し、いと深し、いと広し」

というのがそれです。

だから、義という言葉は、私たちにはもう今度は恐ろしい言葉ではなくて、非常にうれしい恵みと同じことなんです。義と恵みは一つなりと。「与える義」だから、審く義ではなくなつた。しかし、そのことは贖罪という事態をはつきりと顕すことが、「神の義が顕れた」ということ。

「神はおのれ自ら義たらんが為」



とはそのことです。「おのれ自ら義たらんが為」というのは、罪を勝手にいい加減に赦すのではない。はつきりとその代償をとる。即ち、贖罪という代価を、無限の代価を神さまは受けとって、これが義を与え、罪に対する審判がキリストにおいて全部一身にしよわれたわけだ。十字架でもってキリストは審判を全部しよって、

「お前の罪は全部私が引き受けたぞ」

と。私たちの罪、この「我という罪」は、

「罪は完全に私は引き受けた」

と、キリストが。マルチン・ルターが宗教改革をするその要は正にこの一事だったんです。そういう要の事態をルターが本当に受けとったから、おのずから――ルターは宗教改革をしようなんて思っていやしない――おのずから宗教改革になってしまった。必然の結果です。やむにやまれずしてそうなった。だいたい、本当に生きている人はみんなその「やむにやまれない」姿です。ロダンというやつでも。それで、はつきりしましたね、この義と
いうのが。

●「われ渴く」(第五言)

それから今度は、さっきのヨハネ伝19章28節の、

「われ渴く」

という言葉。

「さいわいなるかな、義に飢え渴くもの、その人は飽くことをえん」

という。しかし、キリストは血を流しました。血が流れた喉の渴きなんてものは、これは本当にそういつた土壇場にでつくわした人でなければわからない。これはなにさま、釘付けにされてしまったんだから。

●「こと終わりぬ」(第六言)

そして、六番目が、

「こと終わりぬ」

という言葉です。

●「わが霊を汝の御手にゆだね」(第七言)

七番目が、ルカ伝23章46節、

「父よ、わが霊を汝の御手にゆだね」

と。これは詩篇31篇5節から来ている言葉。キリストの祈りはたくさん詩篇から出てくる。

「われ^{たましひ}霊魂をなんじの^{みて}手にゆだね。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖い

たまえり」(詩篇31・5)



「あなたが私を贖ってくださった。主さま、みなお委ねいたします」
これが私たちの地上を去るとき告白でもありますね。何一つとして自分の力でできたものなんか一つもない。みんな主の力による。
その七つの言葉という。十字架上の七語とはそういうわけです。

●永遠の贖罪を終えた

それで今日は、その六番目の

「こと終わりぬ」

です。何が終わってしまったのか。もちろん、私が言うまでもなく、この「こと」とは第一番先の、贖罪のこと、贖罪の大業、罪を贖ったその大業がここで終わった。これはヘブル書の9章11節から読みますと、

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ

此の世に属せぬ更に大なる

高次なる、

全き幕屋を経て、¹² 山羊と^{こやし}犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架という至聖所に入つて、

永遠の贖罪を終えたまへり。」（ヘブル9・11～12）
あがない

これが正に「こと終わりぬ」です。

「永遠の贖罪を終わった」

と。永遠の贖罪を終わった。歴史がどのくらい続くかが、ただ一つの別なことがあった。そのことはこのキリストの十字架という事実で、この事実が永遠の贖いを終えた、終わらしめたところの事実である。

私たちは既に解決済みの人間です。

「まだ問題がある、問題がある」

と、問題ばかり考えているね。問題はないんです、ひとつも。いろんな問題はみんなそれは第二義的な問題です、すべて。第一義的な問題は解決しているのに、そのことを忘れたり、いい加減にしたりしているのが今の一般の現実ですよ。ただ一回終わった、それを本当に受けとつたらば、その次に今度は続いてくるところの無限の事柄がある。まあそれはこの次にお話することにしましょう。

ゲーテの『ファウスト』の一番終わりの方にこういう言葉があった。第二部の終わり。私はこれを『永遠の女性』という論文の中にちよつと書いておいた。「神秘の合唱」（12104～12111行）というところ。

「過ぎ行くものはすべて映像にすぎず、



満ち足りざりしものここに円現し、
名状しがたきものここに成就せり。

この言葉です、「こと終われり」というのは、ここに成されたという。
永遠の女性われらを引き上げ。」

と。どこへ引き上げるかということは、私が二行それに付け加えたといつか言ったですね。
「愛と喜びとをもって

聖なる太陽へ」

と。これはゲーテが書いたのではない。これは私がゲーテのあとに付けた。ゲーテはこの『ファウスト』を「太陽」という言葉で始めているから、「太陽」という言葉で終えてやろうと思つてね。「聖なる太陽」とは神さまのことです。神聖な太陽へと連れて行く。男はダメだから、女が神さまへと連れて行くという、ゲーテさんらしい言葉です。もつとも、そこを歌わないところがいいんでしょうけれどもね、私みたいにはつきり言ってしまうのではありません。けれども、東洋にちよつと不思議なやつがいると、天界でゲーテは思っているかもしれない。

「そうだ。ゾンネで終わつて、それはありがとう」
なんて言っているかもしれない。

●此岸彼岸これ一如

なぜ、私が今こんな句をそこに引つ張りだしたかといいますと、このゲーテが歌っているのは天界の話です。地上ではどうしてもダメなんだ。

「地上の一切の諸行無常、過ぎ行くものは真理の映像に、影に過ぎない。比喩的なものだ。どうしてもこの地上では満ち足らない。届かない。そういったものはこの天上では円現する、事実となる」

と。それから、筆紙に尽くしがたきものがある。いかなる彫刻家も、いかなる画家も、いかなる詩人も、どうしても筆を折らざるをえない境地がある。ダンテも「天国篇」でそう書いている、

「もうこれ以上書けない」

と。ミケランジェロも鑿^{のみ}を一番終わりにには放つてしまっている。未完成に終わっている。ロダンなんかにもそういうのがあるね。そういうわけで、

「実は地上では未完成の形が本もので、完成したような形はうそだぞ」
なんてなことで本当はありましょーうね。

「日本の詩」なんていう詩の全集が出ても、藤井武の詩が出てこない。こんな偉大な詩が、盲点があつて見えない。いかに日本人というのは本当の宗教の世界に対して盲目であるかということがそれでもわかる。いわゆる詩人なんてはダメですよ。



そういう名状しがたきものがここでは成されている。ところが、その

「ハハハ、ハハハ」

とゲーテが天上のことを歌っているその「ここに」が、こっちからいうと、彼岸^{ひがん}をキリストは常に此岸^{しがん}として動いていたひとである。

「御意の天に成るごとく地にも成らせたまえ」

と言って、成らしめていたのがキリストである。これが本当の信の現実なんです。私が、

「信は即ち現^{うつ}である」

と言うのはそのことです。我々はゲーテの最後の境地を実は現実につかんでいる人なんです、本当の信仰の人は。

「ああ、ゲーテは深淵な高遠なことを言っているな」

と言って、ただ眺めているんだ、普通の人たちは。

「いやいや、それはこっち側に来ておりますよ」

ということが、私たちは言える。まあ大詩人とか何とかいいにしても、大したことはない。なにも偉がる必要はないけれども。なるほど詩はえらいよ。ちよつとゲーテみたいな詩は何年たつたって書けませんよ、こんな凄いのは。それは人々は、天才あり、凡人あり、賜物あり。もう人間というのは大体、生まれつき決まっているんだよな。ナスの枝にはキュウリは成らない。私に絵を書けと言ったってダメなんだ。ただ、ある程度の素質があれば、それは今度は努力でもって、あるところまで行くというのはおおいにいろいろなケースはありますよ。けれども、全然欠けたようなものをやろうということは苦^く労^{らう}さんな話で、決してそれは神さまの御意に沿ったことではない。そんな努力は、それはとんでもない余計な努力だ。

「お前の天職はこっちにあるんだ、大学なんかに入らなくていいんだ」

と。あの吉川英治なんてそうですよ、小学校しか出ていない。何でも大学に入らなくてはなんて思ったら大間違いだ。

昔、私は「彼岸」という号を書いてみた。それはある意味において彼岸^{ひがん}なだけどもさ、それは私の彼岸であるなんてなわけで。けれども、信仰はどこまでも此岸^{しがん}的なものである。こちら岸のことである。思われている世界、望まれている世界ではない。願われている世界ではなくして、現に受けとつている内実の世界です。

だから、皆さんの祈りも、お願いしていいですよ、もちろん。お願いしていいですけども、

「その願いは聴き届けられている」

という確信をいただきながらの願いでなくてはいかん。

「多分、そうなるかな。どうだろう。願つてみたけれども」

なんて、そんなのはひとつも願いになっていない。本当の願いは、今どんなにそれが成就しなかりうが、本質的には来ているんだと。それで祈りは力である。そこで祈りは神の力



である。祈りは現実である。祈りは即ち、

「こつち側にきている」

ということは、もうひとつ別な言葉でいえば、自分を向こう側に投げ出しているということ。自分を向こう側に投げ出している彼岸が即ち、ここで此岸になっている。今度はこつち側で彼岸が即ち、此岸になってしまう。そして、

「あ、地上が彼岸だったか」

と上から見ている。逆になる。彼岸と此岸が反対になってしまう。

「また戻ろうか」

ではないよ。そうではない。コロサイ書のところにそういうことが書いてある。コロサイ書3章、

「汝等もしキリストと共に甦えられしならば、

キリストと共に甦えられし以上だよな。

上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。² 汝ら上にあるものを念い、^{おも}地に在るものを念うな、³ 汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

即ち、「あちら、あちら」と言っているその中に自分は隠れていると言って、

「彼岸にもう来てしまっているぞ」

というようなことを言っているんですよ、こここのところで。

⁴ 我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに

現れん。」(コロサイ3:1-4)

というんだから。

「地上にありながら、もう天上の人だよ。天上を此岸としている人だ。単に彼岸ではないぞ」

と。此岸彼岸これ一如という。逆に上りきりではダメですよ、皆さん。今度は、下においてこなければ。下りてくるというのは、また恋しいから下りてくるのではない。下りてきて、今度はこの此岸の人間を救うために下りてくるんです。これがいわゆる浄土真宗でいうところの「還相回向^{えさうこう}」とか何とかいうね。天使が上り下りする。そういうのと同じことです。……(以下録音切れ)